

汽水・淡水魚類:絶滅危惧Ⅰ類種

和名	科	生息状況	主な生息地	変更
アカザ	アカザ	水生昆虫の豊富な中流域に生息する。瀬の浮き石の下や隙間に潜んだり、石のまわりをチョロチョロと泳ぎ回ることが多い。県内では1993年に厳木川での確認例と、1978年に田手川水系に生息の可能性を示唆した記録があるのみであるが、いずれもその後の確認記録は無い。	厳木川、田手川	—
アリアケヒメシラウオ	シラウオ	一生を感潮域上限付近の淡水域という限られた場所のみ生息する。生活史をとおして産卵盛期は4～5月。餌は、微小なワムシ、ミジンコ、カイアシ類。ふ化から満1年で死亡する年魚である。	筑後川水系、嘉瀬川水系、六角川水系	—
ニホンイトヨ	トゲウオ	県内では3月中旬～下旬に、河川に遡上する個体がシロウオの梁で混獲されることがある。県内の河川での生活は不明であるが、産卵場は緩やかな流れの小川や水田横わきの用水路で、オスが植物片を集めて作った巣で卵を保護する。ふ化した稚魚は2～3cmになるまで淡水域で生活し、秋までには降海する。	半田川	—
カジカ中卵型	カジカ	浮き石が優占する河川中・下流域でみられる。回遊型の生活史を有しており、多良山系のほとんどの河川に幼魚が遡上していると思われるが、潮止堰や魚道のない堰・落差工の存在により遡上が妨げられ、生息できる河川や範囲は限られる。糸岐川は潮止堰がなく、比較的多くの個体を確認することができる。福岡県玄界灘側の古い記録もあることから、松浦川などの玄界灘側の河川にも生息していた可能性があるが、記録は残っていない。現在九州では多良山系から有明海に注ぐ佐賀・長崎両県の河川及び熊本県の八代海に注ぐ一部の河川のみにしか生息しておらず、貴重な個体群である。	多良岳山系の小河川	—
カジカ大卵型	カジカ	河川上流域に生息し陸封された生活史を有する。嘉瀬川水系の個体群は2つのダムにより分断的に生息する。中川では中木庭ダムの建設に伴い、ダム上流側へと移植が実施され、比較的良好な増加が見られる。しかしながら、いずれの生息地においても落差工や砂防ダムによる移動阻害、砂の堆積による浮石の減少などのため、生息範囲は限定的である。	嘉瀬川水系、志佐川水系、多良岳山系の小河川	—
カワバタモロコ	コイ	河川下流の水草の多い緩流域やクリークにみられる。産卵は5月中旬～7月下旬にかけて行われる。卵は直径1.0mm程の粘着卵で、沈水植物や冠水した陸上植物等に産着される。食性は雑食性で、付着藻類や水生小動物等を食べる。	筑後川水系、嘉瀬川水系、六角川水系	—
セボシタビラ	コイ	平地を流れる捨て石や杭などがある河川や用水路に生息する。底質は砂泥から砂礫までと選択の幅は広い。産卵期は2月下旬から8月。産卵母貝としては他のタナゴと異なりカタハガイへの嗜好性が高い。近年(2009年)、六角川でも記録がある。	筑後川水系	—

↑:ランクアップ、↓:ランクダウン、新:新規掲載種、—:ランクの変更なし

汽水・淡水魚類:絶滅危惧Ⅰ類種

和名	科	生息状況	主な生息地	変更
ニッポンバラタナゴ	コイ	流れがきわめて緩やかか、全くない水域に生息する。産卵はイシガイ、マツカサガイ、ドブガイなどの淡水産二枚貝に対して行われる。佐賀県では局地的には純系のニッポンバラタナゴの個体群が存在するが、ほとんどの水系にタイリクバラタナゴが侵入しており、雑種化の進行が懸念される。	筑後川水系、嘉瀬川水系	—
ヒナモロコ	コイ	平野部の流れが緩やかな砂泥底～泥底の素掘りの用水路や細流にすむ。抽水植物や沈水植物が生え、ヤナギ類などの岸辺の植生の発達する場所を好む。冬季はため池などに移動すると考えられている。1970年代を最後に県内での生息は確認できていない。	筑後川水系、嘉瀬川水系	—
アリアケシラウオ	シラウオ	ふ化仔魚は筑後川の感潮域で10～11月に採集されるが、それ以上の大きさに成長したものはほとんど河川から採集されない。秋に産卵のため、遡上してくる。	有明海湾奥部、筑後川水系、嘉瀬川水系	—
チワラスボ	ハゼ	ワラスボに似るが、小型で下顎の下面にまばらな髭を持つことで区別できる。静岡県から沖縄県にかけて分布し、県内では、砂分の多い筑後川河口域及び玄界灘側河川河口域の泥中に生息する。生活史に関する知見も乏しく、県内の生息状況も詳しくは把握できていない。	筑後川、有田川水系、東松浦半島の小河川の河口域	—
キセルハゼ	ハゼ	有明海側で記録されているが、湾奥部のような軟泥の底質は好まないことから、有明海でも生息環境は限られるものと思われる。通常の魚類調査では採集することが難しく、調査は不十分であるが、玄界灘側では未確認である。アナジャコ類の生息孔を利用するとされ、これらが多産する環境も必要不可欠である。	筑後川、田古里川の河口部及びその周辺の砂泥質干潟	新
アリアケスジシマドジョウ	ドジョウ	圃場整備未実施の田園環境で、水田に接して流れがある水路があり、水田と水路の間を魚類が行き来できる環境で個体数が多い。圃場整備後の田園環境でも、このような条件が維持されているところでは生き残っている。流れの緩やかな砂泥底の河川または用水路に見られる。	筑後川水系、嘉瀬川水系、六角川水系	—

↑:ランクアップ、↓:ランクダウン、新:新規掲載種、—:ランクの変更なし

汽水・淡水魚類:絶滅危惧Ⅱ類種

和名	科	生息状況	主な生息地	変更
アリアケギバチ	ギギ	水のきれいな早瀬～早瀬尻の大石の下などに潜み、夜間や雨後の濁りに乗じて水生昆虫や甲殻類、小魚などを捕食する。産卵期は6～8月で、石の下面や植物帯の根元などの暗がりに2.3mmの寒天質で包まれた黄色の卵をかためて産みつける。卵は3～4日でふ化する。	嘉瀬川水系、巖木川、多良岳山系の小河川	—
オヤニラミ	スズキ	河川中流域の水のきれいな、緩やかな流れの石の間や岸辺の植物の根元に単独で定位することが多い。節足動物や小魚など動くものしか食べない。産卵期は4月中旬から夏にかけてで、ヨシなどの植物の沈水部分に2.2～2.4mmの卵を産着させオスが保護する。	嘉瀬川水系、田手川、城原川、巖木川、有田川	—
カゼトゲタナゴ	コイ	河川本流よりも、流れが緩やかな小河川や用水路に生息する。本県では佐賀平野を中心に農業用水路や生活用水路などの小水路で見られるが、生息域が人間の活動の場とほぼ重複するため、水路等の改修により近年多産するところが少なくなった。産卵は主に小型のイシガイに行われる。	筑後川水系、嘉瀬川水系、六角川水系	—
クルマサヨリ	サヨリ	汽水域に生息し、水草の小枝やアマモなどに粘着糸で卵をまきつける。7cmほどの幼魚はよく川の中で見られる。15cm以上になると浮遊植物食となる。	筑後川水系、嘉瀬川水系、六角川水系、塩田川水系、松浦川水系	—
ヤマノカミ	カジカ	11月に川を下りはじめ、1～3月に河口の沖合でタイラギ等の二枚貝の貝殻に2.0～2.2mmの赤みを帯びた卵を産着させる。30日弱でふ化し、5～7月にかけて河川に遡上する。河川では甲殻類や魚類など動くものを食べる。	筑後川水系、嘉瀬川水系、六角川水系、塩田川水系、多良岳山系の小河川	—
タビラクチ	ハゼ	有明海、伊万里湾、仮屋湾等の流入河川河口域及びその周辺の泥質干潟に生息する。近年玄界灘側でも確認されているが、有明海に比べ生息範囲はより限定的で、個体数も少ない。テッポウエビ類の生息孔を利用するとされ、これらが多産する良好な干潟の消失に伴い減少していると考えられる。	筑後川水系、嘉瀬川水系、六角川水系、有田川水系、及び東松浦半島の小河川などの河口域及び周辺の泥質干潟	↓
シロチチブ	ハゼ	汽水性の魚であり、砂泥底にも見られるが砂底や砂礫底を好む。カキ殻の多い砂泥の干潟でカキ殻の裏面に産卵する。近年、そのような干潟が減少している。資源状態の動向は不明である。	有明海の砂分が多い干潟域・浅海域	↑
ドジョウ	ドジョウ	冬季は農業用水路などの泥底で過ごす。春から秋にかけては水田やその周りの小溝で生活する。産卵は、「しろかき」の終わった水田に遡上した後、数日たってから行われる。産卵後は稚魚と成魚は同じ水田内で生活する。山間部のため池や湿田などでは、まだ、姿を見ることができる。	佐賀県内全域	↑
ハゼクチ	ハゼ	軟泥質の干潟が広がる浅海域に分布し、稚魚や未成魚は河川の感潮域に、成魚になると河口域や周辺の浅海域に生息する。生息数の減少が続いており、かつてよく見られた大型個体も少なくなった。減少の原因を明らかにし、何らかの保全策が必要と思われる。	有明海全域の沿岸部及び河川河口域	↑
エドハゼ	ハゼ	有田川、伊万里川、松浦川などの玄界灘側河川河口域の砂泥質干潟に生息する。有明海側でも田古里川河口部で1個体のみであるが確認している。クボハゼやチクゼンハゼに比べると泥質分の多い場所に生息し、生息河川・範囲とも非常に限られる。	松浦川水系、有田川水系、田古里川	新

↑:ランクアップ、↓:ランクダウン、新:新規掲載種、—:ランクの変更なし

汽水・淡水魚類:絶滅危惧Ⅱ類種

和名	科	生息状況	主な生息地	変更
クボハゼ	ハゼ	玄界灘側の河川河口域の砂泥～砂礫底に生息する。有明海側でも田古里川で採集されているが、極めて稀であると思われる。河川内での生息範囲は限定的で、個体数も少ない。わずか30m程度の範囲にしか見られない河川もある。	有田川水系、東松浦半島の小河川、田古里川	新
チクゼンハゼ	ハゼ	玄界灘側の河川河口域の砂泥底に生息する。有明海側の記録はない。エドハゼに似るが、体側の斑紋が明瞭であり、下顎に髭を持つことで区別できる。アナジャコ類などの生息孔を産卵に利用する。河川内での生息範囲は限定的で、個体数も多くはない。	松浦川水系、有田川水系、東松浦半島の小河川	新
クロヨシノボリ	ハゼ	東松浦半島の外洋に面した小河川に生息する。生息地での個体数は比較的多いが、川幅1～2m程度の小規模な河川に多いため、河床のコンクリート化などの河川改修の影響を受けやすい。	東松浦半島の小河川	新
カワヤツメ	ヤツメウナギ	島根県、茨城県以北に分布するとされ、県内では1993年3月に唐津市の半田川に迷入した記録があるのみである。ふ化後1年ほどはアンモシーテス幼生として河川中下流の軟泥底に潜って生活し、眼やえら穴の完成後に降海する。海中では大型の魚に食いつき、吸血生活をする。2～3年の海中生活の後、夏場に河川に遡上して春先に産卵して死亡する。	玄界灘側河川に迷入	新
ヤマトシマドジョウ	ドジョウ	九州と山口県の一部に分布。県内では流れのある河川で、底質が砂礫であるところに生息。エラの穴から砂を吹き出しながら前進してえさを取る。	筑後川水系、嘉瀬川水系、松浦川水系、有田川水系、多良岳山系の小河川	新
エツ	カタクチイワシ	湾奥部の網漁業等で漁獲され、産卵期には筑後川でも網漁業で漁獲されるが、その数は減少傾向にある。ただし、六角川では周年を通して、成魚、稚魚ともに生息数は少なからず見られる。漁獲量はピーク時の約30分の1に激減している。	筑後川水系、嘉瀬川水系、六角川水系、塩田川水系、有明海湾奥部の浅海域	↑
ニホンウナギ	ウナギ	河川の上流から河口・汽水域まで広く生息し、主に夜間に水生昆虫、小魚、甲殻類、貝類、環形類など様々な小動物を食べる。天然ウナギの国内年間捕獲量推移をみると、1960年代は3,000トン前後であったが2006年以降は250トン前後に激減した。佐賀県内におけるシラスウナギの年間漁獲量も、1990年代前半には20kg前後あったものの、2009年以降3kg前後に激減した。	佐賀県内全域	新

↑:ランクアップ、↓:ランクダウン、新:新規掲載種、—:ランクの変更なし

汽水・淡水魚類:準絶滅危惧種

和名	科	生息状況	主な生息地	変更
シロウオ	ハゼ	2月中旬から4月上旬にかけて産卵のために河川干潮域の上限の淡水域に遡上し、沈み石の下面に産卵する。餌は動物性プランクトンである。海での生活はあまり知られていないが、岸近くのアマモ場に多く移動性は小さい。7月に18mm、10月に25mm、12月に35mmに成長する。	松浦川水系、有田川水系、東松浦半島の小河川、多良岳山系の小河川、玉島川	—
スナヤツメ南方種	ヤツメウナギ	河川中流域のツルヨシの根元のような通水性のある微細な砂の中に潜って生活している。ふ化後、3年間をアンモニーテス幼生として川底に潜って泥底の有機物を食べて生活する。4年目の冬には眼、えら穴とも完成して成体になり、4~6月に砂礫底で産卵して死亡する。	筑後川水系、嘉瀬川水系、松浦川水系、城原川、田手川、玉島川	—
ミナミメダカ	メダカ	水田脇の小溝や浅瀬、水深のあるクリークでは岸辺の抽水植物帯に群れて生活する止水生の魚である。卵には長い粘着糸があり、メスは受精してもしばらくは腹部に卵を付着したまま泳ぎ回り、水草などにばらばらに卵を付着させていく。メダカは2013年に2種に分類され、南日本集団はミナミメダカとなった。県内にはこの中の北部九州型、有明海型の2型が分布している。	佐賀県内全域	—
ワラスボ	ハゼ	河口付近の軟泥底を好み国内では有明海にのみ生息する。産卵期は6~9月で巢穴の中に卵を産みつけ、孵化するまでオスが卵の世話をする。佐賀県有明海における正確な漁獲量等が明らかにされておらず、資源状態の詳細は不明である。	有明海湾奥部の沿岸域及び河口域	—
ショウキハゼ	ハゼ	産卵期は7月を中心とした5月~9月で、卵は清掃されたカキ殻に生み付けられ、ふ化するまで雄によって保護される。3年程度生きると考えられている。シロチチブと同じ場所にも見られるが、本種は河口付近にも見られる。シロチチブの幼魚が河川の影響が少ない干潟域を好むのに対し、本種の幼魚はムツゴロウやワラスボの幼魚のように河川の中に集まる。有明海では普通にみられるが、資源状態の動向は不明である。	有明海流入河川河口域及び砂分の多い干潟域・浅海域	↓
トビハゼ	ハゼ	河川河口域の砂泥~泥干潟に生息する。潮が満ちてくると、水を嫌うかのように堤防や石などによじ登る。潮が引いて干潟が現れると、干潟の上を活発に動きまわる。有明海側では広く分布しており、目にするものは多いものの、以前に比べると減っている。玄界灘側では分布が局所的となりつつあり、より注意を要する。	有明海流入河川、松浦川、有田川水系、玉島川、東松浦半島の小河川の河口域	↓
カネヒラ	コイ	県内全域の平野を流れる河川に普通に見られる。植物食性が強い雑食性である。日本最大のタナゴで、短いヒゲをもつが、バラタナゴ類をそのまま大きくしたような魚である。産卵は秋で、二枚貝の出水管から産卵管を挿入し、瞬間的に1個から数個の卵を産みつける。稚魚は冬を貝の中で過ごし、4月頃に貝から泳出す。	筑後川水系、嘉瀬川水系、六角川水系、松浦川水系、	新
カワヒガイ	コイ	河川の中流から下流域や灌漑用水路に生息し、砂や砂礫底を好む。産卵期は5月から7月で、産卵はタナゴ類と同様に淡水産二枚貝に行われる。ふ化した仔魚はすぐに貝から泳ぎ出す。	筑後川水系、嘉瀬川水系、六角川水系、松浦川水系	新
オオヨシノボリ	ハゼ	玄界灘側では比較的普通に見られるものの、有明海側では個体数が少ない。とくに筑後川水系~六角川水系にかけての佐賀平野を流れる河川では稀。河川改修や堰の設置などにより生息環境が悪化している。	嘉瀬川水系、六角川水系、塩田川水系、松浦川水系、多良岳山系の小河川、東松浦半島の小河川、玉島川などの中・上流域	新

↑:ランクアップ、↓:ランクダウン、新:新規掲載種、—:ランクの変更なし

汽水・淡水魚類:準絶滅危惧種

和名	科	生息状況	主な生息地	変更
イドミミズハゼ	ハゼ	伏流水や地下水中に生息するため、確認が困難で、調査も不十分であり、現状確認されているのは太良町の河川河口域及び周辺沿岸域のみである。海岸整備などで人知れず生息地が消失した場所もあると思われる。	多良岳山系の小河川河口域及び周辺沿岸域	新
ツチフキ	コイ	流れのあまりない用水路や水通しの良いクリークなど浅く、泥気の多い所を好んで生息する。産卵は水深50cm以下の柔らかい泥底に雄が掘った窪地状の産卵床に行われ、雄によって保護される。	筑後川水系、嘉瀬川水系、六角川水系、松浦川水系	新
マサゴハゼ	ハゼ	砂泥～泥質の河口干潟に生息するが、底質の変化に弱く、環境が悪化するとすぐに姿を消すとされる。生息地での個体数は比較的多いが、玄界灘側を中心に生息範囲が局所的になりつつある。	筑後川水系、嘉瀬川水系、六角川水系、松浦川水系、有田川水系、東松浦半島の小河川などの河口域	新
カワヨシノボリ	ハゼ	他の多くのハゼ類と異なり、海へ下らず河川内で一生を送る。県内には筑後川水系と六角川・松浦川水系以西とで形態的に異なる集団が生息している。河川改修や落差工の設置、ダムの建設により生息環境が悪化・消失しており、確認できなくなった河川も多い。県内では本流での減少が著しく、生息範囲が支流に限られるなど局所的になりつつある。	筑後川水系、六角川水系、塩田川水系、松浦川水系、有田川水系、東松浦半島の小河川などの中・上流域	新
ニクハゼ	ハゼ	玄界灘側の河川河口域で確認されているが、他の干潟のハゼ類同様に干潟環境の悪化に伴い減少していると思われる。アマモ場などの調査は不十分であるが、このような環境も消失が著しいため、生息範囲は縮小しているものと予想される。	松浦川水系及び東松浦半島の小河川の河口域及び周辺の内湾浅所	新

↑:ランクアップ、↓:ランクダウン、新:新規掲載種、—:ランクの変更なし

汽水・淡水魚類:絶滅のおそれがある地域個体群

和名	科	生息状況	主な生息地	変更
松浦川のサケ	サケ	10月上旬～12月にかけて海から遡上してくる。松浦川では唐津市相知町牟田部から山崎の間で産卵行動が見られる。卵は水温8度では約80日でふ化し、稚魚はさらに80日ほど産卵床の中で生活する。体長6～10cmまでは河川、沿岸域に留まる。なお、別水系の玉島川では県外から取り寄せた稚魚の放流が行われており、成魚の遡上も見られる。	松浦川水系	—
有明海のスズキ	スズキ	有明海産のスズキは酵素及びDNA分析の結果、タイリクスズキとの交雑個体群に由来する独特な集団であることが明らかになっている。そのため、環境省第3次レッドリストからは「有明海のスズキ」として、絶滅のおそれのある地域個体群に指定されている。 佐賀県有明海におけるスズキの年間漁獲量は、昭和30年代後半には207～322tに達していた。しかし、平成元年～10年には36～82t、平成11年～26年には23～48tと激減しており、資源状態は明らかに悪化している。	有明海及びその流入河川河口域	↑
玄界灘側のアブラボテ	コイ	松浦川では伊万里市の松浦町桃川～大川町大川野付近と南波多町高瀬付近の2カ所のみ生息する。いずれも個体数は非常に少ない。他の純淡水魚のように有明海側のものと玄界灘側のものでは異なる遺伝子集団である可能性も高く、生息地が局限される玄界灘側のアブラボテは、その生存に十分な配慮を要する。	松浦川水系、有田川水系、東松浦半島の小河川	新

↑:ランクアップ、↓:ランクダウン、新:新規掲載種、—:ランクの変更なし